



減少したオオヨシキリ

大塚之稔*

2009年4月29日、長良川下流へと車を走らせる。海津市（旧海津町）油島、千本松付近まではカモ類の調査で毎年やってくるが、これより下流は久しぶりである。長良川河口堰反対運動をしていたときには、何度も調査で行き来したこの道もあれから久しく通っておらず、何か懐かしく感じた。右手に見える揖斐川にはあいかわらず広大なヨシ原が広がっている。

今回の目的は、長良川下流域のヨシ原に生息する鳥類を調査し、河口堰が稼働する以前の状況と比較することにある。当時、堰が運用されると、河川敷は常に水に浸かった状態になり、そのためヨシ原が減少し、そこで繁殖するヨシゴイやオオヨシキリ（図1）などの鳥類に大きな影響を与えるのではないかと予測した

1)。今回はその検証である。

調査スタート地点である伊勢大橋付近に車を止め、上流に向かってさっそく調査を開始する。上流（北）に向かうのは、太陽を背にした方が順光で観察しやすいためであり、過去の調査でも同様に行った。調査方法としては、歩きながら目視できる、あるいは囀っている種類と個体数を記録していくもので、上空を通過するものも全て含めるが重複しないように気をつけなければならない。林内で行う場合には通常50m幅（片側25mずつ）で観察できた鳥を記録するが、この場所は堤防上からしか行えず、しかし見通しがきくため水面側50m内で観察できた鳥を記録する方法で行った。調査距離は1kmで、時速2km/h程度で歩きながら行う「ラインセンサス法」と呼ばれて

*連絡先：〒502-0931 岐阜市則武147-3

表1. 長良川下流域ヨシ原の鳥類(繁殖期).

調査日 調査距離 観察種数	1990年		2009年	
	5/27 500 m 12種	7/8 1000 m 16種	4/29 1000 m 17種	6/13 1000 m 15種
カイツブリ			0.4	
カワウ		24.0	0.6	0.6
ヨシゴイ		0.8		
ゴイサギ		0.2		0.2
ダイサギ		0.2	0.4	
コサギ		1.8		
アオサギ		0.4		
カルガモ		0.4	1.2	1.0
トビ			0.2	
バン		0.2	0.2	
オオバン			3.0	
ケリ	3.2	8.6		0.2
クサシギ	0.4			
イソシギ			0.4	0.4
ソリハシシギ	0.4			
コアジサシ		0.6	0.4	
キジバト	0.4		1.0	
ヒバリ	0.4			0.6
ツバメ	1.6	4.8	0.4	0.4
ハクセキレイ				0.2
ヒヨドリ	0.8		1.4	0.2
オオヨシキリ	9.2	7.8	2.2	2.0
セッカ	0.8		0.2	0.4
スズメ	1.2	1.0	0.4	1.0
ムクドリ	9.2	1.2	2.0	1.4
ハシボソガラス		0.4		0.2
ドバト		0.4	2.6	0.4

数字は、1 ha あたりの密度。



図1 オオヨシキリ



図2 オオバン

いるものである。

想像していたよりはヨシは残っていたが、それでも当時の半分以下に見えた。さっそく目についたのがオオバン5羽の群れである(図2)。この鳥は以前には数少ない冬鳥であったが、近年、生息分布が南下してきており、西日本各地で普通に観察されるようになってきている。琵琶湖では繁殖もするようになってきており、木曽三川流域での繁殖もまもなくであろうと思われる。その後もヨシ原の中から出てくる個体が増え、15羽を数えることができた。上空をカワウやツバメなどが通過するだけで、オオヨシキリの声がまったくしてこないのが気になった。オオヨシキリはその名のとおり、ヨシ原を主な生息場所とする鳥で、東南アジアの島々で冬をすごし、4月下旬に日本に渡ってくる夏鳥である。雄は、なわばりを形成するために渡来直後から「ギョ・ギョ・ケケシ・ケケシ・・・」と、大

きな声で囀る。いつ食事をするかと思うほど一日中鳴いており、時には夜間も囀る。この鳥は古くは、その鳴き声から「行々子(ぎょうぎょうし)」と呼ばれ、夏の風物詩としても親しまれてきた。騒がしいことを「仰々しい」というのは、この鳥が語源である。調査コースの半分がすぎ、近鉄鉄橋付近までくると、やっとオオヨシキリの声がしてきた。この付近はヨシ原がよく繁茂しており、オオヨシキリが繁殖地として選んでいるものと思われた。囀っていた雄は11羽であったが、1 haあたりの密度は当時の1/4以下であった。時期が少し早く、まだ渡ってきていない個体もいる可能性があり、検証には後日の再調査を待つことにした。

6月13日、2度目の調査である。鳥類の繁殖期は、普通4月から7月であり、まさに繁殖真っ盛りの時期である。今回の調査の大きな目的は、オオヨシキリの繁殖なわばり数の計数である。結果は、

前回同様、ヨシが多く繁茂する場所に集中して見られただけで囀っていた雄の数は10羽であった。オオヨシキリは、雄の囀りはよく確認できるものの、雌はヨシの中に潜んでいることが多く、また一夫多妻制という特殊な繁殖形態をしているため、全個体数を把握することがとても難しい。したがって、囀っている雄の数をなわばり数とし、それでもって比較するようにした。これは、1990年調査も同様である。

1 haあたりの面積で囀っていた雄の数で比較すると、1990年では5月に9.2羽、7月に7.8羽と高い密度であったが¹⁾、2009年では4月に2.2羽、6月に2.0羽と当時の1/4程度に減少していることが明らかになった。これはヨシ原の面積が減少していることと関係があるものと思われる、当時の懸念が実際のものとなった。

また、1990年7月には、ヨシゴイを4羽確認することができたが、2009年には確認することができなかった。ヨシゴイは、サギ類の中では最も小さく、夏鳥として全国に渡来するが、近年数が減少している種であり、岐阜県では、絶滅危惧類に指定されている²⁾。この貴重な鳥が見られなくなったことは残念なことである。

引用文献

- 1) 大塚之稔．1994．長良川下流域に生息する鳥類．長良川下流域生物相調査団（編），pp. 54-63．長良川下流域生物相調査報告書．長良川下流域生物相調査団，岐阜．
- 2) 岐阜県 2009 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）改訂版：<http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11264/sizen/redpabukome/red-listdoubutu2.htm>（参照2010-4-12）．